

# 幼稚園児の交友関係に関する研究Ⅱ

○筒井信子

藤田よし子

河内知子

大阪基督教短期大学

公明短期大学

公明短期大学

## 〔目的〕

幼稚園という集団生活の場において、豊かな交友関係を持つ幼児と、少ない幼児が見られる。その特性については前発表Ⅰでのべた。

本研究においては、面接法によるソシオメトリックテストの際に得られた選択、排斥の理由を分析、検討してみる。

選択、排斥の理由を検討し、交友関係に影響を及ぼす理由を明確にすることにより、保育効果を向上させる一つの手がかりを得ることができるとはなかろうかと考えた。この考えに基づき、年齢別、性別による理由を分析することを本研究の目的とする。

## 〔方法〕

1 実施期日 昭和48年11月6日～15日に実施した。

(表2) 好きの理由別出現率 (単位: %)

理由	性別	男								女							
		3才	4才	5才	3~5才	3才	4才	5才	3~5才	3才	4才	5才	3~5才				
I 環境生活	1 家庭の接近	7.6		7.1		8.7		7.9		7.4		10.3		7.4		8.3	
	2 幼稚園関係	0		4.8		4.8		4.1		0		4.9		9.7		6.8	
	3 生活の接近	22.7	30.3	35.7	47.6	33.8	47.2	33.1	45.2	9.3	16.7	26.4	41.7	31.4	48.1	27.1	42.2
II 類似	4 気合の一致	0		0		0		0		0		0		0		0	
	5 遊びの興味の一致	0		3.8		1.3		2.2		5.6		2.9		1.6		2.5	
	6 意見の一致	0	0	1.0	4.8	0	1.3	0.4	2.6	1.9	7.4	0	2.9	0	1.6	0.2	2.7
III 親和感	7 温和	4.5		2.4		4.8		3.7		5.6		7.4		6.6		6.8	
	8 親切	0		1.0		1.7		1.2		0		2.0		3.1		2.3	
	9 快活	0		0		0.4		0.2		1.9		0		0.4		0.4	
	10 好き、感じよい	1.5		6.2		1.7		3.6		5.6		5.9		3.1		4.5	
	11 面白い	0		2.4		6.9		4.1		0		2.0		1.9		1.8	
IV 功利性	12 同値	0	6.0	0.5	12.4	0.4	16.0	2.6	13.2	0	13.0	0	17.1	0.4	15.6	0.2	16.0
	13 教えてくれる	0		3.8		2.2		1.6		1.9		0.5		1.6		1.2	
	14 貸してくれる	4.5		1.0		1.3		1.8		13.0		0.5		0.8		1.9	
V 優位性	15 物をくれる	6.1	10.6	1.4	6.2	0.9	4.3	0.8	5.9	3.7	18.5	1.5	2.0	0.4	2.7	6.0	4.1
	16 学業、知能の優秀	0		1.4		0.4		0.8		11.1		1.5		0.4		1.9	
	17 人格の優秀	0		1.4		0.4		1.0		0		1.0		0.4		0.6	
	18 身体及び運動機能優秀	1.5		0.5		1.3		2.2		0		0		0.4		0.2	
	19 容姿に関して	3.0	4.5	1.9	5.2	2.2	4.3	0.4	4.7	0	11.1	2.9	5.4	2.3	3.5	2.3	5.0
VI 過性不明	20 今日遊人友	1.5	1.5	0.5	0.5	1.7	1.7	1.2	1.2	0	0	2.0	2.0	0.8	0.8	1.2	1.2
	21 不明	33.4		15.3		6.0		13.5		24.0		11.7		9.3		11.8	
VII 不明	22 悪回答	13.6	47.0	8.1	23.3	19.0	25.1	13.8	27.2	9.3	33.3	17.2	28.8	18.6	27.9	17.1	28.9

(表1) 年齢性別の対象児数

年齢性別	3才児	4才児	5才児	計
男	22	70	80	172
女	18	68	86	172
計	40	138	166	344

## 2 対象児

大阪市にあるS幼稚園、G幼稚園の3才児3クラス、4才児7クラス、5才児6クラスを対象とした。人数については(表1)に示した。

## 3 調査手続

面接法によるソシオメトリックテスト実施の1週間前、保育室内にクラス全員の写真を掲示し、写真に興味を持つようにした。1週間後にその写真による面接を実施し、好き、嫌いの友だちそれぞれ3名を制限選択させ、あわせてその理由を聞き出した。

## 〔結果と考察〕

### —好きの理由の分析—

幼児があげた仲よしの理由を各カテゴリー別に分類し、出現率を示したのが(表2)である。

(表2)の選択理由の分類は、石黒(1951)の友人選択の理由を参考にし、作成したものである。

幼児に選択理由を明確に答えさせることは、むずかしいのではなからうかと当初予想された。しかし、(表2)に示した如く、不明、無回答合わせた出現率は男児24.3%女児25.9%であった。年齢別に見ると男5才児24.6%、4才児18.6%、3才児40.9%、女5才児24.4%、4才児24.6%、3才児31.5%であった。

このことから3才児では出現率が高いが4、5才児では3才児に比して低く、約半の幼児が明確に選択の理由をのべていることが判明した。選択理由のうち最も出現率の高いのがIの外部的要因である。これを年齢別、性別にみると5才男児が47.2%、女児48.1%、4才男児47.6%、女児47.7%、3才男児30.3%、女児16.7%となっており、性別による相違は5才児においてはわずかに2.4%、4才児が2%とその差が他の年齢に比較して最も高い。3才児では6.0%で、項目(2)について3才児の回答は皆無である。以上のようにIについては各年齢共に女児よりも男児にその出現率が高い。

5才児についてみると男女差は殆んどない。男女共その最も出現率の高いのがI環境、生活の接近によるものであり、次に高いのがIII親和感である。その他の出現率についてみるとVの優位性、IV功利性、II類似が低く、特にIIでは男児13%女児16%となっている。各項目別にみるとIの3が最も高く、IIの4が皆無であることがわかる。

4才児についてみると、5才児同様男女の差は殆んどみられない。出現率も5才児とよく似た結果を示した。

3才児においては、4、5才児に比較して男女の差がみられる。最も大きい差を示しているのはIであり、男児は女児に比べて13.6%も高くなっている。IIにおいては女児が男児よりも24%高い。IIIについては女児が男児よりも6.9%高く、IVでは2.9%、Vでも女児が男児よりも6.6%高くなっている。男児でその出現率の最も高いのはIである。女児においてはIVが最も高いが、Iのそれと殆んど差はない。

以上年齢別にみてきたが、全体的にみると3才女児以外はIが高く、その中でも(3)生活の接近が特に高いことがわかる。IV功利性においては年齢によって差がみられ、3才児が4、5才児にくらべて高い値を示している。Vについては3才女児を除いて、年齢による差はなく出現率も低い。

石黒(1951)が指摘しているように、幼稚園においても環境、生活の接近、親和感を理由としてあげるものが多い。但し、3才児にはこのことはあてはまらない。また功利性に関する石黒の結果も、年齢が大きくなるほど出現率が低くなっている。本結果も3才児が高く、年齢差が現われている。

—嫌いの理由の分析—

幼児があげた嫌いの理由を、各カテゴリ一別に分類し、出現率を示したのが(表3)である。

(表3)嫌いの理由別出現率

性別 理由	♂				♀				選択理由項目
	3	4	5	3&5	3	4	5	3&5	
I	10.6	15.7	11.7	13.2	22.2	14.7	16.6	14.0	I.積極的妨害 (乱暴、けんかをする)
II	25.8	28.1	22.5	25.2	20.4	33.3	19.8	25.1	
III	3.0	8.6	5.0	4.2	3.7	5.9	5.0	5.2	
IV	36.4	28.6	44.6	37.0	29.6	27.0	48.4	35.0	
V	24.2	19.0	16.3	19.4	24.1	19.1	15.1	17.6	

II.消極的妨害(きまりを守らない、遊んでくれない)。III劣性(知的、行動、容姿、身体的欠陥)。IV ない。V 不明、無回答。

嫌いの理由の出現率を年齢、男女別にみると、5才児においては、IV ないが最も高く、3、4才児の中でも特に高い。次に最も低いのはIIIの劣性で、男女全く同じ値を示している。その他の項目については男女の差は殆んどない。

4才児において最も高いのはII消極的妨害で、女児の方が男児よりも高くなっている。IIIの劣性では他の年齢が低いのに比べて男女共や、高い値を示しIIと同様女児の方が高い。

3才児についてみると、他の年齢に比べてIII劣性を除いては男女の差がみられ、特にIの項目ではその差が大きい。男児よりも女児が高くなっている。以上年齢別、男女別にみて、最も低いのはIIIの劣性である。4才児ではII消極的妨害が最も高いが、5、3才児ではIV ないである。